

大田南畝の狂詩の文法

浅山佳郎
巖 明

1 はじめに

1.1 目的

本稿は、大田南畝の狂詩集である『壇那山人藝舎集』（岩波書店全集版）を資料として、狂詩の文法的特徴について論じるものである。

結論として、次の2点を指摘する。1つは、狂詩に用いられている言語が、古典中国語の日本における変容体の一種であることである。もう1つは、その変容が、母語である日本語の転移、および日本漢詩が持つ第2言語としての性格の2つによって説明しうるものであることである⁽¹⁾。

1.2 資料

狂詩の資料としては前述した『壇那山人藝舎集』を用いる。南畝の狂詩集としては『通詩選』のシリーズの方が有名であるが、これは『唐詩選』のパロディであり、『通詩選』の名詩はそれぞれ『唐詩選』の名詩を直接下敷きにして作られている。そのために、文法構造は大きくもとの『唐詩選』の詩句に制約されている。これは、狂詩の文法を検討するための資料として、『通詩選』が適当な対象とならないことを意味する。また同じく南畝には『寝惚先生文集』があるが収められた詩が少ない。よって、量的にもある程度まとまっており、かつ個別の中国詩の直接的な影響を受けていない『壇那山人藝舎集』を用いる。

『壇那山人藝舎集』には、5言律詩が4首、7言律詩が14首、5言絶

句が14首、7言絶句が65首収められている。それらの1つ1つの詩句を単位として、その文法構造を分析する⁽²⁾。全部で97首、460句である。

これと対比する資料として『唐詩選』を用いる。『唐詩選』を選択する理由は、『通詩選』シリーズを作っているところからみて、南畝の中国詩学習の対象として『唐詩選』が最も重要なものであったろうと予測するからである。本稿では『唐詩選』から、上記の南畝の『壇那山人藝舍集』に収められた各詩体の詩数と一致するまで、適当に97首を抽出した。この抽出にあたっては基本的に無作為に選んだが、作者ができるかぎり重複しないように心がけた。以下、本稿で『唐詩選』という時は、この抽出した97首を指す。

2 前提

2.1 狂詩の言語分析の意味

本稿が、狂詩をとりあげるのは、狂詩を日本漢詩の一部として位置づけることが可能であるという作業上の仮説に基づく。日本漢詩は、東アジアに共通の表現形式である漢詩（古典中国語詩）の変容体の1つで、日本において日本化したものととらえることができる。そして、狂詩は形式上も内容上も、規範的に中国の漢詩をとらえる態度から最もかけ離れるので、日本漢詩が持つ漢詩の日本化という特性の最も極端な例と見ることができる。換言すれば、いわゆる「和臭」の最も極端な例と考えることができるのである。この仮説の上で、本稿は問題を文法に限定し、文法上で狂詩を漢詩の変容体ととらえることが適当か否か、さらに適当だとすればどのような文法的な特徴を持つかを論じる。

狂詩が、字数のみを漢詩に合わせて漢字で表記した形式であり、漢詩とはまったく異なる別種の表現形式であるとすれば、その言語についての分析の意味は狂詩にとどまるのみであり、日本漢詩全体とはかかわらない。

しかし、もし狂詩が広い意味での「漢詩」の範囲に入り、古典中国語を最も日本化させた例であるとすれば、その言語的な特徴は、日本漢詩全体において古典中国語がどのように変化したかを見る指針となる。これが、本稿で狂詩の言語的な分析を行なう理由である。

以下、まず、狂詩を言語的に古典中国語による漢詩の変化したものと見ることが可能であるという根拠を3つ示す⁽³⁾。

2.2 根拠(1) 各字の句成分としての分布

まず、『壇那山人藝舎集』および『唐詩選』各詩句の各字について、句の成分としての分布を示す。この調査にあたって、本稿では、「述語」「補語」「連体修飾語」「連用修飾語」「虚詞」の5種類に分類した⁽⁴⁾。この分類は、句を成立させる要素成分としての分類に品詞的な要素である「虚詞」を加えたもので、統一性に欠ける。ただし、定型詩を各字のレベルで分析する場合、中国語では形態論的な品詞分類が難しいので、品詞としての分類に完全に依拠するわけにも行かず、また定型詩が語と字について一定の関係を一貫して維持しているわけではないので、句成分としての分類のみに依拠するわけにもいかない。よって、ここでは「虚詞」を加えて大きく5つに分ける分類法をとる。

以下、その分類について説明を加えておく。

「述語」は、動詞述語または形容詞述語として機能している字を指す。古典中国語にはこのほかに名詞述語が存在する。「黄金七千斤（黄金は七千斤なり）」のような判断文と呼ばれる文の述語である。この判断文も完結した文であり、名詞述語も完全な述語であるから、本来は本稿の分類である「述語」に帰属させなければならない。しかし、中国語においては、判断文が主題—評述形式をとって、その範囲がかなり広くなる場合があり、判断があいまいになる可能性があるため、ここでは形式上動詞述語と形容

詞述語のみを「述語」とする。

「補語」は、主題となる名詞句または述語に対して項となる名詞句または独立した名詞句を指す。つまり「楓樹林（楓樹の林）」の「楓樹」などのような、連体修飾の機能を果たす名詞句以外の全ての名詞句全てを指す。「補語」という用語は、中国語文法としては、述語に後置される名詞句のうち、「賓語」以外の結果状態などを示すものを指すのが本来の意味である。しかし本稿では、述語に対して項となる名詞句という日本語文法における「補語」の概念を用い、さらにそれを拡大して、「連体修飾語」以外の名詞句全てを便宜的に「補語」と呼ぶことにする。その結果、本稿の「補語」には、「主題」名詞句を含むいわゆる「主語」と「賓語」という、述語の前後に置かれる全ての名詞句、および動詞述語または形容詞述語を持たない詩句の名詞句などを含むことになる。

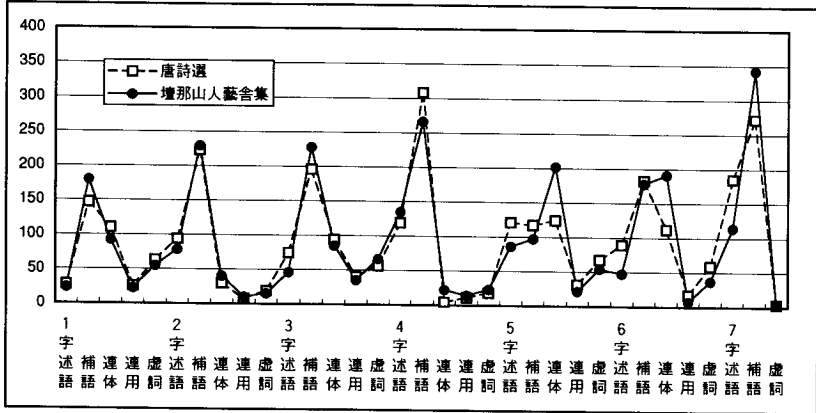
「連体修飾語」は、名詞、形容詞、動詞が名詞の前に置かれて、その名詞を修飾しているものであり、「連用修飾語」は、名詞、形容詞、動詞、副詞が動詞の前に置かれて、その動詞を修飾しているものである。

「虚詞」は、句の成分としては、「連用修飾語」に分類されるものが多いが、必ずしもそればかりではない。また、近世の日本の中国語学習者にとって「虚詞」がきわめて重要な分類であり、そうした意識を反映させつつ、各字ごとの文法性の分布を見るためには、これらを「連用修飾語」に含めるのでは十分でないと考え、独立した分類項目の1つとした。なお、本稿では、伝統的に「虚詞」とされるものから、情態・程度・量の副詞を除いたものを「虚詞」としてあつかった。これらは「連用修飾語」に分類する。

以上の分類に基づいて、『壇那山人藝舎集』と『唐詩選』の各詩句の各字について、その成分としての分布を比較したのが、次のグラフである。なお、ここで「1字」から「7字」というのは、各詩句の「第1字め」から「第7字め」の意味であり、5言詩については、その第1字めを7言詩

の第3字めに相当するものとみなして集計した。そのため第1および第2字は372字、第3字以後は460字が総計数となる。

グラフ 『壇那山人藝舎集』と『唐詩選』の各詩句における成分としての分布



このグラフは、各字が、それぞれ「述語」として働いているのか、「補語」となる名詞句として働いているのか、といった分布を示すものである。グラフ上で、『唐詩選』と『壇那山人藝舎集』のそれぞれを示す線がほぼ重なっており、各字が「述語・補語・連体修飾語・連用修飾語・虚詞」のどれになるかという数値が『唐詩選』と『壇那山人藝舎集』でほぼ同じであることになる。これは、各字の成分としての分布が南畝の狂詩と漢詩とで近似していることを示す。

つまり、句の成分という点から考える限り、主題、述語、述語の項といった狂詩の文法的な基本構造は、『唐詩選』中の漢詩と大きく異なっていないと考えることができる。狂詩は、一見すると漢詩としての言語構造を大きく壊しているように見えながら、実際は、このグラフに見るように、かなり接近している。

なお、ここで比較的大きなズレを見せている5字めと7字めの「述語・

補語・連体修飾語」の問題については、以下の「3.2」であつかう。

2.3 根拠（2）日本語に基づく句の構造

次に、日本語の言いまわしに基づいていると判断できる句をとりあげる。狂詩には、あきらかに日本語の諺や慣用表現などに基づいて書かれた部分がある。次の例は、「鬼の目にも涙」という日本語に基づいたものである。前半の「鬼の目」は、助詞「の」を除いただけでそのまま擬似的な漢語として用いており、それ以外の後半部分は「含涙雨」という動詞と目的格名詞の構造を持つ動詞句に翻訳されている。

（1） 鬼目亦応含涙雨（南畝「題白壁画」詩その1）

こうした表現の大半は、この「鬼目」のように、語彙は日本語そのままの語彙を漢字表記したものが用いられる。問題は文法である。日本語と中国語では基本的な語順に差がある。もし狂詩が、単に漢字表記という外面だけを漢詩と似せたものであり、古典中国語による漢詩とは根本的に異なるものであるとすれば、語順においても日本語の文法が優先する可能性があり、いっぽう、かなりはずれたものではあっても、狂詩が基本的に古典中国語による漢詩としての枠組みを残すものであるとすれば、中国語の語順が文法として優先的になるはずである。

中国語と日本語の基本的な語順についてみるならば、この問題はとくに述語動詞と「賓語」の間で顕著になる。中国語では「賓語」が動詞の後ろに置かれるのに対し、日本語では前に置かれるからである。

以下の（2）のaは、日本語の語順による例であり、「目くじらを立てる」が「目鯁立」という語順のままになっている。bは、中国語の語順による例であり、「槌で庭を掃く」が「以槌掃庭前」というように、中国語の介

詞構造の動詞句になっている。

- (2) a 獵師目鯢立相尋 (南畝「題鯨吹潮図」詩)
 b 家々以槌掃庭前 (南畝「大黒贊」詩)

南畝の『壇那山人藝舍集』には、上の例のような日本語の言いまわしに基づく表現を、全部で約 38 例認めることができる。これを日本語の語順が反映しているもの、中国語の語順に置き換えられているもの、どちらともいえないものに分けると、以下のような数値になる。

- (3) a 日本語語順が反映するもの …………… 6
 b 中国語語順になっているもの …………… 22
 c どちらともいえないもの …………… 10

とくに、動詞と目的格名詞句からなるものは、ほぼ全て中国語の語順になっており、それが「喫茶」のような語彙的なレベルではなく、上に見た「槌で庭を掃く」のような句レベルで行われていることは、少なくともある程度までは、狂詩が中国語として形成しようとする意識のもとに作られていることを示す。

2.4 根拠 (3) 各詩句の理解可能性

最後に、各詩句を中国語として見た場合の理解度を見る。以下の数値は、中国語として解釈した場合の意味と本来の狂詩としての意味の比較を、ほぼ一致するもの、問題のあるもの、中国語としては理解できないものの 3 つに分類したものである。

この判定には、まず、中国語を母語とする厳明が、資料とした『壇那山

『人藝舎集』の各詩句を中国語として読んで解釈し、その解釈を、日本語を母語とする浅山が岩波全集版の底本に加えられてある訓点に基づいて訓読した場合の解釈と比較して行った。「ほぼ一致するもの」は両者の解釈がほぼ同じになったもの、「問題のあるもの」は中国語として解釈することが可能ではあるが、訓読した場合の日本語としての解釈とは異なるもの、「理解できないもの」は中国語としては解釈することが不可能なものである。

- (4) a ほぼ一致するもの …………… 227(49.3%)
 b 問題のあるもの …………… 160(34.8%)
 c 理解できないもの …………… 73(15.9%)

この比較には、固有名詞や背景の事情などといった必要な情報の欠如による理解不能または誤差は加えていない。こうした問題は、中国における漢詩内部においても、時代差や地域差などによって存在するものであり、そこに用いられた言語自体に基づくものではないからである。

この数値によれば、必要な情報を注として加えるという条件が満たされれば、南畝狂詩の約半数の詩句が古典中国語による漢詩としても正しく理解可能であり、言語的な理由で全く理解できないものは2割に満たないことになる。これも、狂詩が漢詩の変容の一部であり、それとはまったく異なるものではないという視点を支持する根拠である。

ここまで見た3つの根拠は、狂詩が古典中国語を基本的な枠組みとして作られていることを示すものであった。狂詩は、一見漢詩のルールを完全に壊しているように見えるが、それは平仄と押韻という音声面において顕著であっても、句の構造という点では、基本的に古典中国語による漢詩の枠組みに従っている。逆にいえば、狂詩における言語上の非中国的な特性

は、漢詩の日本化を考える上で、その言語上の問題についての基準となる
 ということができる。

3 狂詩の文法的な問題点

3.1 名詞句だけからなる句

南畝狂詩の各詩句の文法を『唐詩選』の詩句と比較する場合、最も顕著な特徴の1つが動詞述語または形容詞述語を持たない詩句、つまり名詞のみで構成されている詩句が多いことである。

先の「2.2」で詩句の各字の成分としての分布を比較したが、総計の数を見ると、「補語」となる名詞が南畝で1520字、『唐詩選』で1446字であり、南畝が『唐詩選』の1.05倍とほぼ同じ水準になるのに対して、「述語」となる動詞や形容詞は、南畝で529字、『唐詩選』で709字であり、南畝は『唐詩選』の0.75倍に過ぎない。つまり、南畝の狂詩は全体として述語動詞や述語形容詞が少ない。

本稿であつかう『壇那山人藝舎集』と『唐詩選』における「名詞句だけからなる詩句」の数値は以下のようなになる⁽⁵⁾。なお、()内の%は総句数における名詞句だけからなる詩句の占める割合である。

- (5) 『壇那山人藝舎集』…………… 78句 (17.0%)
 『唐詩選』…………… 27句 (5.9%)

量的に南畝の狂詩は『唐詩選』の3倍近くになり、また、南畝における当該の詩句数が17%になるところから見て、これは狂詩と漢詩の顕著な構造差の1つであると判断できる。

南畝の狂詩における「動詞・形容詞述語の無い句」は、大きく2つに分けることができる。1つは、漢詩の一般的な特徴である前4字または前2

字と後3字に2分した分析が可能なものであり、もう1つは、そうした分析が不可能なものである。以下、南畝の狂詩において「動詞・形容詞述語のない句」が多くなる理由を、この2つに分けて考える。

まず、第1の、漢詩の一般的な構成である前4（2）字と後3字に分けられるものである。これは南畝の狂詩と『唐詩選』の漢詩とで同じ構造を持つものである。たとえば、次の2つのa bそれぞれに、構造上の差を見ることは難しい。

- (6) a 高雄紅葉美人顔（南畝「壬寅中村座秋狂言」詩）
 b 蘭陵美酒鬱金香（李白「客中行」詩）
- (7) a 飯田町上小松軒（南畝「七月二十六夜過小松軒遇雨」詩）
 b 姑蘇城外寒山寺（張繼「楓橋夜泊」詩）

これらは基本的に2つの2字名詞の後ろに2字+1字の名詞句を置く構造で、名詞句を重ねていく比較的単純な方法である。そして、この構造が南畝の狂詩においてはきわめて多い。

動詞述語は、名詞句とある格関係を持つことが可能であり、動詞述語の存在は文法的な構造を決定する。逆に動詞述語を持たない場合、動詞による構造を持つことはできない。その意味で名詞句のみからなる詩句は、構造がゆるやかで、作りやすいといえることができる。構造の制約がゆるいことによる作りやすさ、生産性の高さは、狂詩が古典中国語という外国語によって書かれているとするなら、非母語による表現を比較的容易にする方向ではたらく。ここに見た名詞句を3つ重ねる形式は、その1つであり、狂詩の文法的な特徴の1つが、生産の容易さという第2言語としての合理的な要求に基づくことを示す。

第2の前4（2）字と後3字という分析が不可能なものも多くは、固有

名詞がそうした2字を単位とする基本的な漢詩の構造を壊しているものである。もともと、名詞のみを重ねて、動詞や形容詞といった述語を持たない詩句は、『唐詩選』においても固有名詞が多めに用いられる⁽⁶⁾。南畝狂詩では、さらにそれが漢詩の基本的な構造を壊すようにはたらく。以下のような例である。

- (8) a 高縄十八町 (南畝「品川潮干」詩)
 b 仮名手本忠臣蔵 (南畝「小野氏宅観戯場番付山田氏春日部氏
 在坐」詩)
- (9) a 天下市川海老蔵 (南畝「題栢筵外郎売図」詩)
 b 矢倉太鼓声 (南畝「顔見世」詩)

(8)は、単一の語句とみなすことが可能な固有名詞によって詩句全体が成り立っているものであり、(9)は固有名詞が、前4(2)字と後3字の分かれ目にまたがって用いられているものである。

またこのほかに、構造としては先に述べた3つの名詞句からなるものであるが、固有名詞のみによって1つの詩句が成り立っているものもある。以下の例である。

- (10) a 団十伝九七三郎 (南畝「題三優人図」詩)
 b 阿亀阿徳阿多福 (南畝「題阿福女図」詩)

こうした、固有名詞が多用されて、動詞・形容詞述語が用いられなくなることについては、母語である日本語の影響を指摘することができる。いうまでもなく、南畝の狂詩においては日本の固有名詞はほぼそのままの表記で用いられることが多い。そして、日本語の固有名詞は中国語に比べて

長くなりがちであり、そのため1つの名詞が2字から3字あるいは4、5字を占めることになり、漢詩の基本的な構造にもあわなくなる。さらにこうした長い名詞が詩句の大半を占めた場合、動詞句を形成するための空間を十分に確保することができないので、名詞句だけからなる詩句が増えることになる。

以上、この「3.1」項では、狂詩の文法的な特徴の1つとして、名詞句だけからなる詩句が多いことを示し、その理由として、母語である日本語からの影響、および複雑な構造を避けることによって生産性の高さを確保しようとする第2言語としての合理性の2つを指摘した。

3.2 連体修飾を含む句

『壇山人芸者集』と『唐詩選』の各詩句の文法的な構造を、「2.2」項で見た各字の句成分としての分布から比較すると、南畝の狂詩に以下の2点の特徴を指摘することができる。

- (11) a 『壇山人芸者集』の狂詩は『唐詩選』の漢詩より5・6字めに「連体修飾語」が多い。
- b 『壇山人芸者集』の狂詩は『唐詩選』の漢詩より7字めに「補語」が多く、「述語」が少ない。

これはどちらも同じことを指す。つまり、各詩句の最後の3字が連体修飾を持つ名詞句となる率が、南畝の狂詩において『唐詩選』の漢詩よりも高いということである。そしてこの差は、他の字が持つ句成分としての差の大きさに比較してもとりわけ大きいことから、有意味に異なっていると考えることができる。

各詩句の最後の3字が連体修飾語句を持つ名詞句になっている詩句の数

値は以下の通りである。なお（ ）内の％は、総句数に占める割合である。

- (12) 『壇那山人藝舍集』…………… 177 句 (38.5%)
 『唐詩選』…………… 90 句 (19.6%)

この数値によれば、末尾3字の連体修飾構造は、南畝の狂詩が『唐詩選』の漢詩の2倍にのぼる。もともと連体修飾語自体が南畝の狂詩では全体的に多く、「2.2」項で用いた分類の総計でも南畝の632字に対し『唐詩選』の473字と、1.34倍になる。それと比較しても、この末尾3字の連体修飾は多い。

そして、最後の3字が連体修飾語句を持つ名詞句の大半は、以下の(13)に見るような2字の名詞句が連体修飾部となり後ろに1字の底名詞が置かれるものである。南畝の狂詩でも『唐詩選』の漢詩でも8割以上を占める。

- (13) a 今日暫同芳菊酒 (王之渙「九日送別」詩)
 b 美女不知悪女情 (南畝「題阿福女図」詩)

末尾3字が連体修飾部を持つ名詞句となる場合、この名詞句に対する動詞がその前に置かれ、その動詞に対して当該名詞句が目的格または場所格などの格関係を持つ場合が多い。上の例もそうであるが、以下のaは目的格、bは場所格の例である。

- (14) a 横笛休吹塞上聲 (張喬「宴邊將」詩)
 b 宮闕參差落照間 (盧綸「長安春望」詩)

こうした末尾3字の連体修飾部を持つ名詞句が前の動詞に対して格関係を持つという構造は、中国語詩としても特殊なものではない。ただ、それ

が狂詩において偏向して用いられる傾向があるということの理由としては、以下の2点を考えることができる。

第1は、母語としての日本語の影響である。日本語は中国語より長めの連体修飾部を持ちやすい⁽⁷⁾。とくに動詞に後置される名詞を底とする場合、古典中国語は長めの連体修飾部を確保できない。それは、古典中国語でも連体修飾部は名詞句の前に置かれるので、連体修飾部が動詞と当該の名詞の間に挟まれることになるからである。こうした理由もあって、古典中国語では、連体修飾部を持つ名詞を、日本語に比べるとやや避ける傾向にある。こうした日本語と中国語の差が、狂詩に用いられる連体修飾に反映したという理由である。

もう1つは、末尾3字が連体修飾部を持つ名詞である場合、1つの詩句全体の構造がやや簡単になりやすいという理由である。

末尾3字が連体修飾部を持つ名詞句である場合、その前には述語が1つしかない可能性が高い。実際に、『唐詩選』においては、末尾3字が連体修飾部を持つ名詞句である90のうち、前に2つ以上の述語を持つものは8つにすぎず、『壇那山人藝舎集』では177のうち12にすぎない。つまり、末尾が連体修飾部を持つ名詞である場合、1つの詩句全体は1述語の構造となる。

述語は格関係などによって句の構造に制約を与えるので、それが1つである場合、2つ以上であるよりも全体の構造が作りやすいことになる⁽⁸⁾。作りやすさ、つまり生産性の高さは、外国語を学習する際に有利である。述語が1つの構造は、2つのものより単純で生産性が高くなる。そして、1述語は、結果的に末尾3字に名詞句を要求しがちになる。狂詩の末尾3字に連体修飾句が多くなる理由の1つである。

以上、この「3.2」項では、狂詩の文法的な特徴の1つとして、連体修飾が多くなることを示し、その理由として、前項と同様に、日本語から

の転移と第2言語の合理性を指摘した。

3.3 格関係の問題

次に、南畝の狂詩を中国語として見た場合の問題点として、ある述語に対して、格関係が不適当な名詞句が用いられているということを指摘することができる。次のような例である。

(15) 積也瘡奇哉（南畝「病積」詩）

この詩句の訓読は、底本に加えられている訓点にしたがえば、「しゃくやつかへにきなるかな」である。詩としての本文である「積也瘡奇哉」は、この訓読日本語を、そのまま直接的に漢字表記したものである。

この構造については、「也」の用法の問題は置くとして、「積」と「瘡」という病名の後ろに「奇」という述語を置くことが、古典中国語として適当でないということを指摘できる。古典中国語としての「奇」という述語は、「N奇」という形式の場合は、「Nが奇である」という意味に用いるのが普通だからである。いっぽう日本語としての「奇」という語は、訓読み「くし」でも、音読みによる「きなり」でも、「病に奇し」や「病に奇なり」などという表現が可能である。つまり、日本語では「奇」という述語の対象を「に」という格によって示すことができる。これに対して、古典中国語としては、「奇N」と後ろに名詞を置く場合でも、「Nを奇とする」という目的語－動詞述語構造とはなるが、日本語のような「Nに奇である」という格関係はあらかわせない。

こうした例は、それほど多くはない。中国語が格助詞を持たないこと、対象が詩なので表現上の制約がゆるいことといった理由から、許容される名詞と動詞・形容詞の範囲のはばが大きいからである。それでもいくつか

の不適當な格関係が南畝の狂詩には存在する。

これらは理論的には、2つに分けられる。1つは日本語の格関係が転移したものであり、もう1つは日本語の格関係とは関わらないものである。以下の(16)例は日本語の格助詞の影響である。

(16) 自大神宮多鬮肩「南畝「瀬川仇浪得戯字」詩)

訓読は「大神宮より鬮肩多し」である。「自」は起点の介詞としては「ヨリ」という訓が可能でも、比較の対象としては使えない。いっぽう日本語では比較の対象も「より」となるので、そうした日本語の格が影響したものである

しかし、こうした例は少なく、個別の例に対しては、日本語の格関係が影響したかどうか明確にならない。以下の例は、日本語の「に」や「で」といった格助詞の転移とみることできるが、明確ではない。しかし、いずれにしろ古典中国語の名詞と動詞の関係としては、不適當な組み合わせであるものである。

(17) a 泥坊眠物見（南畝「松」詩）

b 坂東一藝満金箱（南畝「記辛丑顔見世」詩その1）

c 懸声忽昇肩輿去（南畝「溝店夜雨（叡麓八景その8）」詩）

a例は、底本の訓点によれば「物見に眠る」と訓読する。「物見の松に眠る」の省略か、あるいは「に」が情況を示すもので「物見をしているうちに眠る」のかは置くとして、いずれにしろ古典中国語として「眠」に対する格関係を持つことは難しい。「眠花」や「眠雲」などのように「眠」という動詞がその場所を示しているとみなせる名詞を後置する例はある

が、どちらも「妓女で遊ぶ」「隠棲する」という意味の比喻で用いられるものであり、「花（雲）の中に眠る」という状態を言うものであって、一回性の「眠る」という事態を記述するものではない。

b例も、底本の訓点によれば「坂東一の芸金箱に満つ」と訓読する。「坂東一の芸」によって「金箱」が「満」ちるという意味であろうと推測するが、「芸」という名詞とその後ろに置かれる「満」という動詞との格関係は、日本語としては「で」を予想することも可能であるが、中国語としては不明である。

c例も、底本の訓点によれば「懸け声忽ち肩輿（よつで）を昇（か）き去る」と訓読する。やはり「懸声」が後ろの述語部分と格関係を持ち得ない。この例では、日本語としても「懸声」は「肩輿を昇（か）く」の「かく」という動詞と格関係を持ってない。

古典中国語は、格関係を明示する要素を十分には持たない。基本的には動詞の前後という2つの位置が、その動詞に対して何らかの格関係を持つことを意味する。一般的に「主語」および「賓語」と呼ばれる位置である。これに対し、日本語では格関係が、格助詞によってより明示されやすい。

ある動詞がどのような名詞句を要求するかは、日本語と中国語でかなり共通しつつも、それぞれの動詞でやや異なる部分を含む。この名詞と動詞の組み合わせに関する情報は、1つ1つの動詞ごとに学習されなければならないが、学習としてはやや負担が大きい。ところが、中国語の場合、格助詞に相当する格関係を表示する要素が無い。これが逆に日本語であれば、誤った格関係のある名詞と動詞の間に成立させる場合でも、何らかの格助詞を用いなければならないが、中国語では、動詞の前後という位置があるだけであり、さまざまな名詞句をかなり自由に動詞の前後に置くことができる。

結果的に、ある動詞が本来取り得る格関係を超えて、名詞句が用いられることを引き起こす。これは、漢文に格助詞が用いられることが基本的に

ないので、名詞句と述語との関係がややルーズに把握されるためであり、格関係が述語の前と後の位置のみによるという比較的容易な規則の過剰適用である。

この「3.3」項では、狂詩の文法的な特徴の1つとして、格関係が中国語で許容される範囲を超えて用いられる傾向があることを挙げ、その原因として、母語である日本語からの影響と第2言語に見られる規則の過剰適用が認められることを指摘した。

3.4 虚詞の用法

最後に、虚詞の特徴をとりあげる。虚詞は、ここで資料とした『壇那山人藝舎集』と『唐詩選』を比較した場合、南畝狂詩の用例のほうがやや少ない。『唐詩選』の0.87倍程度である。これに副詞を加えてもやはり0.86倍程度にとどまる。これは、南畝の狂詩に、名詞句が多く動詞述語および形容詞述語が少ないことに起因する。虚詞も副詞と同様に句全体またはその中心部分である述語に対して直接的な機能を持っているものが多いからである。

ただし、虚詞の特徴を見る場合、ここで資料とした詩句総数460ではやや不安定になる可能性がある。よって「唐詩」については、浅山(1998)⁹⁾で用いた1676詩句のデータを用いることとし、それにあわせる形で狂詩のデータを調整して両者を比較することとする。その結果が以下の表である。この表は、狂詩の用例が460詩句からのもので絶対数としては不足するので、百分率で比較し、参考のために()内に『壇那山人藝舎集』での使用実数を記した。さらに、最右欄には、もし唐詩と同じ詩句数が確保された場合には、狂詩の虚詞使用数が唐詩の何倍になるかを示した。

表 狂詩と唐詩の虚詞使用量比較

	唐詩	狂詩	唐詩に対する倍率
疑問反語の虚詞	10.9%	11.7% (31)	1.10
否定の虚詞	23.6%	17.0% (45)	0.74
アスペクトの虚詞	7.6%	4.9% (13)	0.66
比況の虚詞	4.0%	7.6% (20)	1.93
真偽判断の虚詞	11.0%	15.5% (41)	1.44
取り立ての虚詞	15.2%	12.1% (32)	0.82
評価の虚詞	12.2%	12.1% (32)	1.01
その他の虚詞	15.4%	18.9% (50)	1.26

唐詩からの差を、最右欄の「倍率」で見ると、『壇山人芸者集』のほうが有意味に低いと考えることができるのは、「不、非、無」などの「否定の虚詞」である。このほかに「アスペクトの虚詞」も低いが、絶対数が少ないので、簡単には判断できない。

この「否定の虚詞」が狂詩で少ない理由は確実にし難い。というのは、動作の否定である「不」の比率は狂詩と唐詩とであまり変わらず、差が大きいのは存在の否定である「無」だからである。上で見たように南畝の狂詩は『唐詩選』の漢詩よりも名詞句が多くなりがちであることを考えると、名詞の否定に用いられやすい「無」が、比較的の名詞句の多い狂詩で、唐詩よりはるかに少なくなっていることになる。

いっぽう、『壇那山人藝舎集』のほうが有意味に高いと考えることができるのは、「元、正、必、恐」および「知、識」などの「真偽判断の虚詞」と分類したものである。この問題には、「む、べし、だろう」などの日本語の推量助動詞と呼ばれる「真偽判断」用の表現形式が転移した可能性を予測することが可能である。また「如・若」など比況の認定を示す虚詞の用例数が多いことも、日本語においてそれらが「真偽判断」モダリティか

らの連続としてとらえられる可能性があるとする、同じように日本語の転移を予測することが可能である。

この「3.4」項では、虚詞の使用に関して、南畝の狂詩には、漢詩と比べて一定の傾きがあり、その一部は母語である日本語の影響を認め得ることを指摘した。

4 結論

以上の検討を通して、本稿では、以下の結論を提示する。まず、

(A) 大田南畝の狂詩が、基本的に漢詩に用いられる古典中国語をその文法的な枠組みとしていること

である。次に、

(B) 大田南畝の狂詩が、以下の4点において、文法的に古典中国語と異なること

名詞句の多用

連体修飾句の多用

格関係の拡大

虚詞使用の傾斜

である。さらに、

(C) (B) で指摘する狂詩の文法的な特徴は、多くの場合、母語である日本語の影響と第2言語としての合理性を、その原因として認め得ること

を指摘する。

注

- (1) 第2言語の概念、およびその研究史については山岡俊比古(1997)などを参照のこと。
- (2) 以下本稿では、資料として詩の1つ1つの句を指す場合「詩句」という語を用いる。文法用語としての「句」と区別するためである。
- (3) 狂詩を最極端とする日本漢詩・日本漢文の言語を、中国語からの変容として記述することは、日本人の書いた漢詩に用いられている言語を、中国語を一端とする中間言語とみなすことである。中間言語には、それ自体の言語的な整合性が予想できるので、これによって、狂詩を含む日本漢詩の言語的な特性を、中国語としての誤用ではなく、共通語としての性格を持つ古典中国語の地域的な変容として記述することができる。なお、中間言語については山岡(1997)などを参照のこと。
- (4) 古典中国語の句成分としては、「主語」「謂語(述語)」「賓語(目的語)」「定語(連体修飾語)」「状語(連用修飾語)」「補語(賓語以外の述語後置成分)」の6種類に分けるのが一般的な分類である。人民教育出版社中学語文室(1984)、劉景農(1994)などを参照のこと。なお、()内の日本語訳は、日本語文法におけるそれぞれの用語の定義と重なるものではなく、便宜的な訳語である。
- (5) 前述したように、古典中国語には名詞述語による判断文があり、動詞述語と形容詞述語を除いただけの「述語動詞のない句」の中には判断文が含まれることになる。本来はこれも除かなければならないが、判断があいまいになる可能性があり、ここでは判断文も「名詞句だけからなる詩句」に含めた。ただし、論者の判断では、このうち、同一認定または属性認定を示す狭義の判断文は、南畝で13例、『唐詩選』で2例である。これを除くと「名詞句だけからなる詩句」は、南畝で65例(14.1%)、『唐詩選』で25例(5.4%)となる。
- (6) 今回の資料では全体として固有名詞を含む詩句は25%程度であるのに対し、名詞句だけからなる詩句では62%程度になる。
- (7) 古典中国語の連体修飾節については、章士釗(1907)や黎錦熙(1924)などで、「之」というマーカーが指摘される。このマーカーが詩語としてふさわしくないという理由からか、詩においては用いられることが少ないことも、連体修飾を減らす理由になるかと考える。
- (8) 狂詩が述語による構造上の制約をさけるのではないかという問題については、連体

修飾と関わって次の事実も指摘できる。『唐詩選』中の漢詩や南畝の狂詩における連体修飾部は、名詞句によって構成されるものが大半であるが、また動詞句によっても作りうる。「共言東閣招賢地」(孫逖「和左司張員」詩)などである。末尾3字が連体修飾部を持つもののうちで、こうした動詞句による連体修飾の例は、南畝の狂詩で13例、『唐詩選』で15例である。絶対数はほぼ同じであるが、『唐詩選』のほうがもともと連体修飾が少ないので、末尾3字が連体修飾部を持つ名詞句全体に対してこの種の連体修飾の占める比率は、南畝で7.3%、『唐詩選』で16.7%となっており、南畝は半分ほどである。ここにも動詞句の多用を避けようとする傾向を見ることが可能である。

- (9) 本論における虚詞の分類は、この浅山(1998)と同じであり、詳しくはそちらを参照されたい。ここでは、「恐、定、元、必」といった真偽判断の虚詞と同じ機能をはたしている知覚動詞「知、識、思」などを、「真偽判断の虚詞」に含めたことを記しておく。さらに「接続の虚詞」をはずしたので、総数としては、上に述べた唐詩1に対する狂詩0.87よりはやや1対1に近い数値になっている。また、表を簡単にするため、量の少ないものは「その他」にまとめたことが、浅山(1998)の表とは異なる。

参考文献

- 浅山佳郎.1998.「伊藤仁斎の漢詩における虚辞について」.『漢文学解釈と研究』
第1輯
黎錦熙.1924.『新著國語文法』.商務印書館
劉景農.1994.『漢語文言語法』.中華書局
人民教育出版社中学語文室.1984.『中学教學語法系統提要』.人民教育出版社
山岡俊比古.1997.『第2言語習得研究(新装改訂版)』.桐原ユニ
章士釗.1907.『中等國文典』.商務印書館